

読書会読書グループのための  
十冊文庫目録 追録 No.36

(令和二年度)

千葉県立図書館

令和三年三月現在

書名・著者	解題
<p>おらぶらぶらひとりいぐも 若竹 千佐子 著</p>	<p>日々を重ねてはじめて手に入れられる感情がある。主人公の桃子さんは七十代。ひとり静かに暮らしているが、内から鳴り響く東北弁丸出しの言葉が、様々な記憶を呼び寄せる。飛び出した故郷、住み込みのアルバイト、結婚、育児、そして夫の突然の死。震えるような絶望の果てに桃子さんは何を手に入れたのか。老いを生きる意味を描いた話題作。 第一五八回 芥川賞 第五四回文藝賞受賞 平成二十九年刊 一六四頁 河出書房新社</p>
<p>教誨師 堀川 恵子 著</p>	<p>十四歳の夏、故郷広島にて被爆し、上京後、半世紀に渡り「死刑囚教誨」を務めた僧侶渡邊普相。死刑制度が持つ苦しみと矛盾を一身に背負ってきた彼の人生を通じ、教誨の歴史や、拘留所内での死刑囚との会話、執行現場に関わる人々の葛藤など、本人へのインタビューにより知ることのできる一冊。 第一回 城山三郎受賞 平成三十年刊 三五八頁 講談社(文庫)</p>
<p>源氏物語 下 角田 光代 訳 (日本文学全集06)</p>	<p>平安時代に紫式部によって書かれた日本文学の名著「源氏物語」を、直木賞など数々の文芸賞を受賞した作家 角田光代氏が、新たな視点で現代語訳した。下巻では、光源氏亡き後、その息子・薫や孫・匂宮を中心に、姫たちとの恋が描かれる。第四十二帖匂宮(におうみや)から最終帖の第五十四帖夢浮橋(ゆめのうきはし)までを収録。 〔上・中巻は十冊文庫で利用可〕 令和二年刊 六三七頁 河出書房新社</p>
<p>沢木耕太郎セッションズ 〈訊いて、聞く〉1 沢木 耕太郎 著</p>	<p>「すべての始まりは会うことからだ。会う。逢う。遇う。遭う。人と人との関わりはその『あう』ことからしか始まらない。」 「対談」と銘打たれて雑誌や新聞に掲載された、著者・沢木耕太郎と吉行淳之介、瀬戸内寂聴ら多様な分野の著名人十人との対話が集められて構成された本作。それぞれの対話を通して、各々の様々な考え、興味深いエピソードが語られる。 令和二年刊 三一〇頁 岩波書店</p>
<p>じんかん 今村 翔吾 著</p>	<p>『常山紀談』では信長から三悪事を働いた者と紹介され、後の世では梟雄と呼ばれ、浮世絵では白髪頭を振り乱し眼鏡く猛々しい姿で描かれる戦国の武将松永久秀。しかし、近年、猛々しさとは無縁の肖像画が発見され、研究者の手によってこれまでとは大きく異なる久秀像が分かってきた。久秀は何を思い、何をなしたか。改めて信長の口から語られる久秀とは。 新進気鋭の時代小説家が描く、現代版、松永久秀の物語。 第十一回山田風太郎賞受賞 令和二年刊 五〇九頁 講談社</p>

書名・著者	解題
<p>線は、僕を描く</p> <p>砥上 裕將 著</p>	<p>大学生の青山霜介は、アルバイト先で水墨画家の篠田湖山と出会い、その場で弟子にされてしまう。さらにその場にいた湖山の孫・千瑛と翌年の湖山賞をかけて勝負することに。水墨画など興味もなかった霜介は、次第にその世界に魅了されていく。水墨画とは線で命を描く芸術。両親を事故で失って以来、孤独の中にいた霜介は、水墨画をとおして生きる意味を見出していく。</p> <p>二〇二〇年本屋大賞二位</p> <p>令和元年刊 三一七頁 講談社</p>
<p>盤上の向日葵</p> <p>柚月 裕子 著</p>	<p>向日葵の花言葉は「あこがれ」。夏の青空に向かって燦々と輝くその花はゴッホの描く魔性の花。異端の天才棋士・上条桂介の人生は向日葵に支配されていく。幾重にも絡んだ壮絶な人生の糸が、そして事件の謎が解けようとしたとき、上条桂介は舞った、あこがれの向日葵に向かって。誰が誰をなぜ殺したのか。真実は永遠の闇に葬られた。山形県天童市。美しい将棋の街で終わるはずだった壮絶すぎる物語。</p> <p>二〇一八年本屋大賞二位</p> <p>平成二十九年刊 五六三頁 中央公論新社</p>
<p>看取りの人生</p> <p>内山 章子 著</p>	<p>「後ろ姿を見て、生き方を学んでほしい」との言葉通りの最期を見せた父・鶴見祐輔（政治家、著述家）。最期に謝った母（後藤新平の長女）。死の直前まで和歌を書き留めさせた姉・鶴見和子（社会学者）。書くことと読むことを教えてくれた兄・鶴見俊輔（哲学者）。リベラルな家族の中「あなたは他の子と違う。あなたが我慢すれば鶴見家はうまくいく」と育てられ、黒子として生きた著者による回想録。伝記的事実からはうかがえない鶴見家のエピソードを綴る。</p> <p>平成三十年刊 一三三三頁 藤原書店</p>
<p>流人道中記 上</p> <p>浅田 次郎 著</p>	<p>万延元年、姦通の罪を犯した旗本・青山玄蕃に、御家存続と引き換えに切腹の沙汰が下る。しかし、玄蕃の答えは「痛えからいやだ」。結果、蝦夷福山への流罪となった玄蕃と、その押送人を命じられた十九歳の与力・石川乙次郎は津軽三厩への旅に出る。口も態度も悪い玄蕃だが、道中出会う様々な事情を抱えた人々を見逃さず、そして見捨てない。</p> <p>この男、果たして本当に罪人か。</p> <p>令和二年刊 三七一頁 中央公論新社</p>
<p>流人道中記 下</p> <p>浅田 次郎 著</p>	<p>流人・青山玄蕃と押送人・石川乙次郎の旅は続く。父の敵を七年も探し続ける浪人。無実の罪を着せられた少年。旅先で病に倒れ、「故郷の水を飲んで死にたい」と願う女。それぞれの事情に寄り添いながら、二人の旅は終わりへと近づいていく。その道中、玄蕃は乙次郎に自身の半生と罪の真実を語る。</p> <p>「武士が命を懸くるは、戦場ばかりぞ。」―玄蕃が、御家を潰しても生を選んだのはなぜか。</p> <p>令和二年刊 二九四頁 中央公論新社</p>

※十冊文庫の「書名目録」は、千葉県立図書館のホームページからご覧いただけます。  
 (どうぞご利用ください。  
 (トップページ左側「各種資料リスト」の「十冊文庫」のページに目録あり)